



はるかにくす

No. 17

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

本の思い出

旧制の高校時代に読んだ本の中から、特に強い印象を受けたものを拾うと、徳富蘆花の「思出の記」、島崎藤村の「夜明け前」、寺田寅彦（吉村冬彦）が書いたいくつかの随筆集などである。それで、20年ほどしてから、その後の経験がまた新たな感激をもたらすかと期待して、「夜明け前」を読み返えそうと試みたことがある。ところが、途中で興味を失って退屈さに耐えられず、3分の1ほどでやめてしまった。やはり私は文豪の名作を玩味する素養に欠けていたし、長い間の専門の研究生活が妨げになったのであろうと思ひ、今も恥ずかしい気がしてならない。

大学院に入ってから、弾性論とか塑性論の知識が必要になったので、それらの分野で当時バイブルともいわれる外国書を開き、その中の式の誘導などに明け暮れる毎日が続いた。しかし、これも1年ほどで終わり、引き続き2年ぐらひは、予定の研究テーマに関係のある内外の論文を拾い出し、文献ノートを作るのに専念することとなった。けれども、当時は本をコピーする手段など全くないので、図面も含めすべて筆写するほかはないのであった。しかし、こうしていると、論文の内容が自分なりによく理解でき、最近の若い人たちのように、コピーのファイルを作って、それで一安心するようなことはできなかったのである。

上のようなことを思い出すと、最初の数年間は何か空費したような気がする。しかし、40何年も前には、弾性論や塑性論の講義など学部にはなく、また、私の選んだテーマが指導教授のそれとは非常に違っていたので、や

大阪工業大学長

伊藤 富雄



む得ないことであった。今から考えると、好きなことをさせて下さった指導教授も偉かったし、私

は一から自分でやらなければならないので、大変ではあったが、このことが、後年独立して研究室を持ったとき、非常に役立ったと思っている。例えば、大学に残って研究テーマをもらう場合、それが指導教授の研究の延長上であれば、すぐにトップレベルの仕事が始められるわけで、そうした仲間をうらやましく思ったこともある。しかし、一人で壁にぶち当たりながら、ほとんど誰もやっていないテーマに取り組むのも大切なことで、後年、及ばずながらこの経験を生かすことができたと考えている。

20代の半ばを過ぎると、文献の調査もかなり楽になった。というのは、当然のことながら、先人の業績も今後の問題点も大体わかったような気がしたので、少しバックナンバーを離れ、よく考えて解析し、実験も行って、世の中の批判を仰ぐことになったからである。従って、身辺には、本の山よりも計算紙や実験のデータが散らばるようになった。

最近の20年ぐらひは、申訳ないことながら、内外の論文集のインデックスをながめることが、本との主なかわりになっている。いいかえれば、同学の人たちが何をし何をしようとしているのか、それを監視し必要に応じて本文を拾い読みするのが、読書の主な目的になってしまった。

(土質基礎工学・工博)

米国読書事情瞥見

ESS(英語研究会)部長
久保山 健太
(工大・IB3)

この夏、我われESSは米国のかのUCLA(カリフォルニア大学ロスアンゼルス校)で、約10日間の海外合宿を行った。

この合宿では、同大学の学生との討論会をはじめ各種の交流を行ったが、日程のあいまをぬっては市中に繰り出し、いろいろと“偵察”を試みたりもした。

その際一つ面白いことに気がついた。行けど探せど書店なるものがほとんど見当らないのである。そんなバカな、まあ日本ほどではなくてもターミナルとか繁華街に行けばきっとあるだろうと思い直して、さらに尋ね歩いてみたが本当でない。

なんてことだと思いつつ、結局滞在中にいろいろと見つけたのがたったの3軒であった。

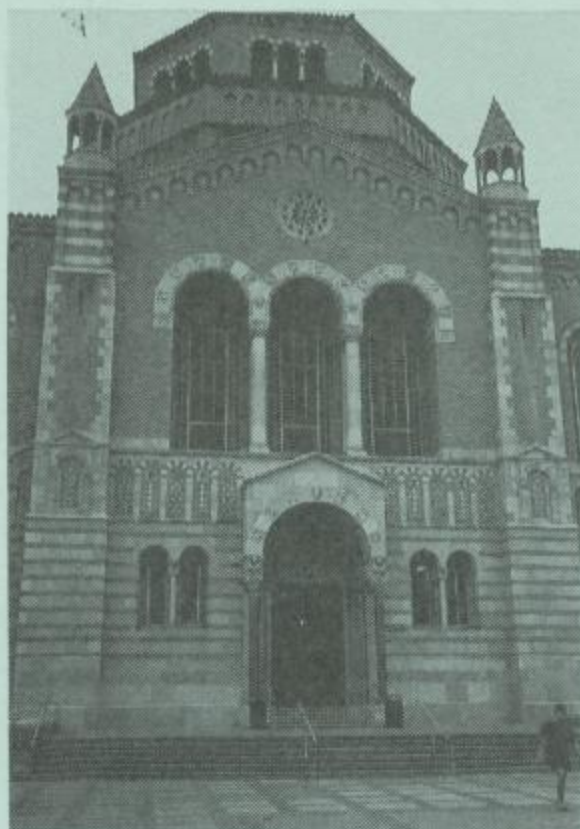
一軒はダウンタウンのアルコプラザ地下、もう一軒が—これこそ当然だと思いが—UCLAの学生街ウェストウッド、そして最後の一軒というのが、なんとリトルトーキョーの紀伊国屋書店という始末であった。

各書店とも日本と同様文庫本やハードカバー、雑誌類が並んでいたが、おなじみの立ち読み風景は見られず、客数もそんなに多くはなかった。日本の書店にみられる独特の雰囲気や活気はあまり感じられなかった。

これはなぜなのだろうか？ アメリカ人はあまり読書などしないのだろうか？ それとも日本人の読書熱の方が異常なのか。(もっとも日本人の場合“つんどく”型の読書(?)が多いとも聞くが)。

ところで、書籍にくらべて新聞や雑誌は町中いたる所で目についた。新聞専用の自販機や、ダウンタウンでは色とりどりの雑誌を吊り下げたスタンドなどをよく見かけた。

日本のような宅配がないだけ、街頭売りがメインとなっているのであろうが、最も手軽に手に入る活字の情報源として新聞がふ



んだんに読まれている点、さすが合理的でプラグマチックなお国柄だとは思った。

一体に「読書」という場合(新聞や雑誌でなく)「書籍」を読むことを意味しているように思うのだが、そうするとアメリカ人はあまり読書をしていない国民ということになるのであろうか。でなければロス市内でのあの書店の少さはどうにも説明のしようがない…。

そう思いつつ、ある日UCLAの図書館を見学する機会に恵まれたので、疑問を解く糸口になりはしないかと早速

出かけてみた。

まず驚ろいたのは規模。UCLAの図書館と一口に言っても各学部、研究所ごとに設置されているものを含めると、案内してくれた学生でさえ「さあ？」と首をかしげる程沢山あるそうである。その中で最も代表的な図書館が University Research Library と Powell Library の2館であり、今回はその Powell Library の方を見学した。3階建の大きなレンガ造りのモダンな建物(写真)で、入口には図書持出等をチェックするゲイトがあった。館内に入ると広々とした書庫に無数の図書が配架されており、蔵書検索用のコンピュータ端末機が沢山設置されていた。

書架にも閲覧室にも多くの利用者がいたがマナーは良く、館内は大変静かであった。学生一人一人がまるで自分の書齋にいるかのようにくつろいで、読書に勉強に熱中していた。豊富な蔵書、優れた設備や環境を目のあたりにして、筆者は「なるほどこんなに立派な図書館がボンボンあるようでは、本屋さんもあまり要らないのかもしれないな」と思った。

以上僅かな体験を通じて日米の読書事情の違いを垣間見ることができた。またそれらが各々の国の文化や伝統の相違に根ざしたものではないかという印象をも得ることができた。

シリーズ『淀川ぶらり散策』

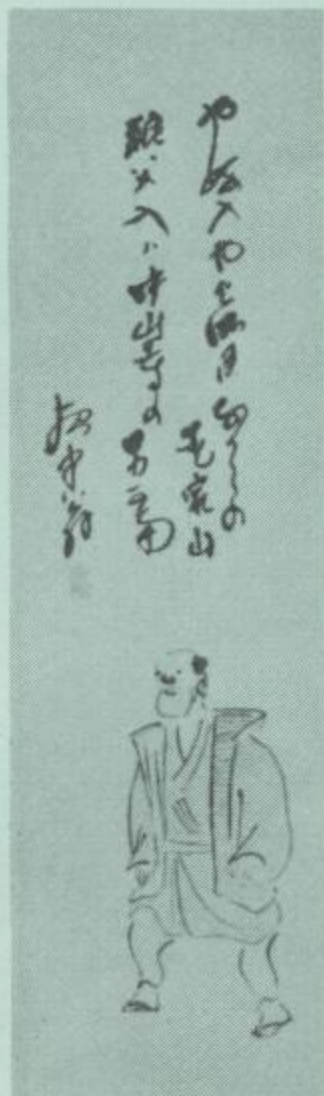
第8話 毛馬と蕪村 その3 桃源郷

さびしさの嬉敷もあり秋のくれ

17、8歳の頃、画と俳諧の修行のため故郷「毛馬」を捨て江戸へ出た蕪村は、早野巴人（はじん）に師事した。巴人の死後は、江戸を離れ、関東から東北にかけて10数年にわたり、放浪した後、終の棲みかを京に定めたのであった。蕪村42歳のことである。当時において俳諧だけでは、なかなか生計をたてるのは難しく蕪村も絵画で主にその生活を賄っていたのであった。宝暦元年(1751)に江戸から京に上洛後も、丹後の与謝に3年、四国の讃岐に3年と流浪の生活を送らなければならなかったのも、絵を描くことによって生計をたてる必要があったためである。

ようやく宝暦7年(1757)に至り、蕪村は京の町に居を構え、画と俳諧において数々の優れた作品を生み出した。この京に住んで以降の蕪村の境地について、人はいろいろ言うが、この京の町における生活こそが、蕪村にとって安住の地、というより心安らぐ世界であった。

江戸における華美で耽美的な風を背にした蕪村にとっては、ひとり静かな京のたたずまいの中に、しもたや風という都の路次の奥深くに我が身を置くことによって、いつでも、この路次深く閉じ籠もれば、俗界を忘れひとり自己の世界にひたることが出来るのであった。それは「ホッ」とした一息をつく、はっきりと心やわ



蕪村筆 養父入自画像

らぐ、余裕のある空間であった。京の街のこの細い路次の出入の適度な暗さと長さとは、蕪村が自らの詩的夢想の世界、心の拡がりの世界へ浸る、出入りのために必要不可欠なものであったと言えよう。

蕪村にとっての「桃源郷」のイメージは、あまり固苦しくイメージされるものではなく、心安らぐ、路傍のひょいひょいと、誰もが見聞きし、通り過ぎしている中であつたのである。

桃源の路次の細さよ冬ごもり

うずみ火や我がかくれ家も雪の中

このような蕪村の境地は、俳句の世界よりは、俳画の世界においてより多く示されている。彼の画の大胆な省略と広い空間、空白の中に描き出された世界の面白さの中に、人々はのんびりと心地よく、身を横たえながら遊ぶ蕪村の姿を見出すことが出来る。

蕪村在世の頃の大坂、守口、淀、京にかけての淀川堤の風景は、フランスのパリのような美しい景観を呈していたという。この淀川べりにあつた生地・毛馬に、蕪村は終生帰つたことがなかったというが、年老いてからも、いや年を重ねるに従い、亡き母への追慕の情と幼き日々を過ごした故郷・毛馬に対する郷愁の念は、ますます強くなるのであつた。

蕪村は、京の町の自ら住まう桃源の路次深くに身を置きながら、数多くの望郷の詩を作っている。

遅き日のつもりて遠きむかしかな

むかしむかししきりにおもふ慈母の恩
慈母の懐袍（かいほう）別に春あり
(春風馬堤曲)

天明3年(1783)2月の寒い夜、68歳で次の句を遺し、蕪村は逝つた。

白梅に明る夜ばかりとなりけり

「第8話 毛馬と蕪村 その3 桃源郷」 完

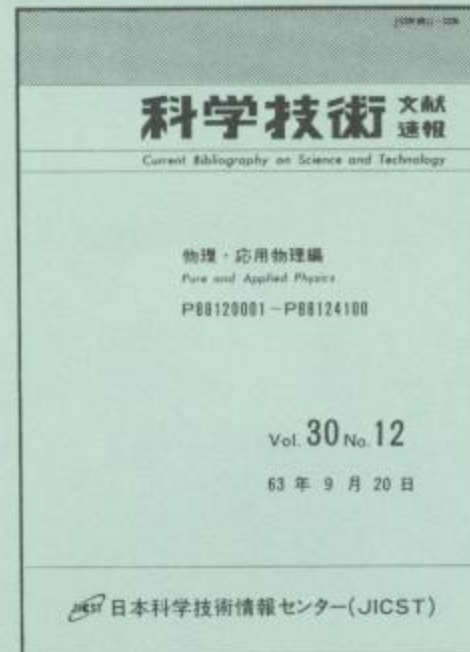
図書館活用の手引き⑮

『科学技術文献速報』ってなに？

科学技術文献速報（特殊法人日本科学技術情報センター〔JICST〕発行）は通称「文速」と呼ばれ研究者の間では広く利用されています。

科学技術文献速報は、日本語で書かれた抄録索引誌で、科学技術の全領域を11の編に分け隔週刊・旬刊もしくは月刊の刊期で出版発行されています。その抄録対象資料は国内外の逐次刊行物13,300種・技術レポート・会議資料等です。この13,300種の中には大阪工業大学の紀要も含まれています。

上段でも述べたように科学技術文献速報は日本語で書かれた抄録索引誌ですから誰もが一番慣れた言葉で調べることのできる二次資料です。調べる方法としては、目次・分類から調べる方法とキーワードを使って調べる方法とがあります。キーワードは「JICST科学技術用語シソーラス」(014.35 J)に基づいてとられており毎号の巻末についています。調べる事項をいくつかのキーワードに置きかえて検索することにより多面的・多角的に調べることが可能です。又、年間索引が各編の最終号の2ヶ月後に発行されています。主題索引・著者索引・抄録資料リストから成っていますので、著者名がわかればその著者が当該年度に発表した記事を調べることも可能です。



中央図書館では、1958年の創刊号より全て受入れしており、最新号は学生諸君がいつでも手にすることができるよう3階第2図書室内雑誌コーナーに配架しています。

★抄録：アブストラクト、記事や論文の内容の概略を迅速に把握するための要約

★★二次資料：原文献(一次資料)を整理してどこに何があるかを示したものの、目録・文献目録・文献索引・抄録集などのこと。

編集後記

★30分45秒の間に文庫本30冊を読破する超能力者をテレビで見た。驚・嘆し絶句したが、いまだに半信半疑。

普通人の負け惜しみではないが、コンピュータなみに頭脳に入力させ、記憶できたとして、思考力・鑑賞力の方は大丈夫なのか。総合力や洞察力は養えるのか。読書で言えば、行間まで果して読めるのか気になった。

★数々のドラマを残してソウルオリンピックは終わった。報じられたドラマ、埋もれたドラマ、知る人ぞのみ知るドラマ……。

情報過多の社会にあって、語られざる行間を読むことは却ってむずかしい。またしてもそんな気がした。

★オリンピック去りて身にしむ秋なれば
秋こそ読書の秋とこそ知れ

原稿募集

『ぱびろにくす』への寄稿を募っています。図書館に対するご意見、ご要望、読書や勉学を通して感じたことなどテーマは自由です。

『ぱびろにくす』を皆様の声の広場として大いに利用してください。

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

No.17 (1988. 10)

編集発行 大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5丁目16番1号

TEL 06-952-3131